

法政大学国際文化学部企画
シンポジウム

「原発震災被災地復興の条件 ——ローカルな声」

期日 10月20日(土)午後2時～6時(午後1時半開場)
会場 法政大学市ヶ谷キャンパス九段校舎3階遠隔講義室2

(<http://www.hosei.ac.jp/campus/ichigaya/ichigaya.html>)

*靖国通りに面した建物です

パネリスト

午後2時～3時20分

横山恵久子氏(NPO 法人難民を助ける会、相馬市在住)

テーマ「福島に生きる」

午後3時半～4時50分

松林要樹氏(映画監督、ドキュメンタリー映画「相馬看花」制作)

テーマ「フクシマで撮る」

午後5時～6時

総合討論



未だに行方不明の子供に呼びかけるこいのぼり、南相馬市原町区

コメンテーター

伴 英幸氏(原子力資料情報室共同代表、事務局長)

家田 修氏(北海道大学スラブ研究センター教授)

司会:中島成久(法政大学国際文化学部教授)

共催:地域研究コンソーシアム社会連携部会

:京都大学地域研究統合情報センター・災害対応の地域研究プロジェクト

問い合わせ先:03-3264-9344(学部事務課) / nnaka@hosei.ac.jp



地震で数メートル陥没し「湖」のできた南相馬小高地区の海岸

趣旨

原発震災とは巨大地震に伴う津波が原発を襲い、甚大な事故につながる危険性(石橋克彦氏の造語)である。3・11ではその指摘が現実のものとして起こり、日本だけではなく世界を震撼させた。震災後一年半が経過した現在でも、数万人の人々が故郷からの離散を余儀なくされ、近い将来帰れる見通しはない。さらに、内部被曝の危険性も指摘されている。

原発震災という未曾有の災害に襲われた福島/フクシマ/FUKUSHIMA に生きるとはどのようなものか、その危機を理解し、支援を続けるには何が必要なのか。一部では3・11はなかったかのような言説がみられる昨今、そのことを改めて考える。